

神の啓示による福音

恵によるあがないは人を自由にする

テモテへの手紙第一 2章 4~6節

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏

----------*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

皆さま、こんにちは。寒い中、このようにお集まりいただきまして、本当に嬉しく思っています。といいますのは、ついこの間、あるネット新聞に「信じてはいけない言葉」というのがあったんですね。信用してはいけない言葉。

「おばちゃんと言う『ここだけの話』」「おじさんが言う『勝手に壊れた』」「お母さんが言う『怒れへんから、いっぺん言うてみ』」「酒飲みが言う『軽く一杯』」最後に「大阪人が言う『行けたら行くわ』」

僕ね、今まで知人・友人・いろんな方々に「聖書のメッセージを分かりやすく話す集会があるから来てください」と言った時、「いやや。行けへん！」と言われたことは1回もない。みんな「行けたら行くわ」って、来たためしがないんですよ。そんな中でみなさん、現にこの場所に入って、座ってるじゃないですか。これを喜ばずにおれるだろうか。ほんとに心から感謝しています。

どうして、ここに来ていただくことを歓迎するのか。
聖書のメッセージは、1人で読んでるだけでは分からない。
分かったとしても、もしかしたら、その分かり方は自己流解釈で、勘違いして分かったと思ってるだけ…かもしれないんですね。
ここに来てクリスチャンといろいろ会話しながら、「あれ？ちょっとズレてる考え？似てるけどどこか違う」みたいな。それは、いろんなクリスチャンとのやり取りを通して修正されていくので、正確な理解に届いて行くと思うんです。

聖書だけじゃなく、分かっていると思っていたことの中で、勘違いしてたと発見すること多いんです。ついちょっと前まで、妻のことを「愚妻」、息子のことを「愚息」と言うことがあったんですね。なんか身内自慢ていやらしいから、身内を下げた「愚かな妻」「愚かな息子」って。
これ英語に直したら foolish wife と foolish son でしょ。バカ息子じゃない？
家族紹介する時「バカ妻とバカ息子です」言うたら、パンチと蹴り来るんちゃう？

だけど、日本人はそういう表現するんだよなあと思って、念のため調べてみたら、なんと、「愚」には2つの意味があるんです。
①愚か。よく使っている意味ですね。②単に一人称。「私」という意味。
つまり、愚妻は私の妻、愚息は私の息子という意味。妻や息子が愚かなんじゃない。あえて言うなら、愚かなこの私に嫁いできてくれた妻。愚かな私のところに息子として生まれてきてくれた子。愚かな妻・愚かな息子という意味は1ミリもない。
「間違ったこと言ってた！」と思ってね。

日本語でもそんなことがあるなら、ましてや専門用語で構成されている聖書は、日本語に翻訳されていても、いつの間にか勘違い理解、自分ではこの意味が分かったと思っていながら、実は神様が思ってもいないような解釈をしている可能性もあるんですよ。

正確に理解しなければ正確な信仰に至らないので、やはり来ていただいて、やり取りするのがいいかなと思うんです。このメッセージが終わった後、ぜひしばらく残っていただいて、周りのクリスチャンに質問なり感想なり言っていただいたら感謝だと思います。では今日は、骨格が非常にはっきりしている聖書福音メッセージの箇所を、一緒に考えたいと思います。

デモテへの手紙第一 2 章

4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。

5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。

6 キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自分を与えてくださいました。これは、定められた時になされた証しです。

今日は3つのポイントに絞ります。3つだけ覚えて帰っていただいたら、そして、分からないところは後で聞いていただいたらと思います。

1) 神は唯一です。 何度も語ってますが、聖書の神は宗教の神じゃない。人が作った神々ではなく、人を創った神です。宇宙を創った神。存在しているものすべての第一原因者。あなたの作者。それが聖書が語っている神です。

お正月に『宇宙はなぜこんなにうまくできているのか』という本を読みました。クリスチャンとして、ちょっとそそられてね。

著者の村山斉（むらやま ひとし）さんは東大の宇宙研究機構の機構長で、カリフォルニア大学バークレー校の物理学、宇宙物理学の博士。

両方兼任されていて、今の宇宙学の中で最先端に立っている学者の一人です。

この方が『宇宙はなぜこんなにうまくできているのか』の7章『宇宙の未来はどうなる』で、「宇宙は人間が存在するようにつくられている」と言うんですね。

自然界には20以上の自然定数がありますが、それがちょびっと変わるだけで、宇宙も人間も存在できません。

日本では、太陽は信仰の対象ですね。おてんとさん。

てんとう虫は太陽に向かって飛ぶからてんとう虫。私は転倒するからと思ってた。

太陽は宇宙の中でブワッと燃えてますね。酸素ないじゃないですか。

宇宙に酸素がないのに、なぜ太陽は燃えているのか。

太陽は水爆と一緒に、核融合反応を起こしてるんです。

太陽は非常に重いので、自分の体重の重みで中心に向かって縮んでいく。これを重力と言います。縮んでいくうちに水素が融合して「爆発だー！」（岡本太郎や）

水爆ですよ。

地上で水爆が爆発したら、キノコ雲が出て広がっていきますね。これが電磁力です。太陽がずっと同じサイズ・同じ温度で燃えているのは、縮んでいこうとする重力の力と、爆発によって広がっていこうとする電磁力の力が、完全に釣り合っているからなんです。

もし重力の方がほんの少しでも大きかったら、太陽は時間とともにどんどん縮んで、最終的に、ブラックホールみたいに重力の点になります。もし電磁力の方がちょっとでも大きかったら、どんどん拡散して行って、とっくの昔に地球もへったくれもないですよ。熱を浴びて、生命体は生き延びることができません。ちょうど良いサイズに調整されているんです。この調整は、物理定数の重力定数や電磁力定数がほんの1%変わるだけで全部崩れます。

太陽だけでなく宇宙を見ていくと、ありとあらゆるものが人間が存在するのに都合良く…本文にこう書いてあるんですよ。「偶然にしては、うまくできすぎている」彼は無神論の科学者ですよ。その人が「宇宙の成り立ちを見ていくと、偶然できたとするなら、うまくできすぎている。どうして、こんなにうまくできているのか。神がつくったんだらうか。もしそんなことになってしまったら、科学者の出番はなくなる」

彼はなぜ神が創ったことを否定するのか。「科学の存在意義は、神無しに宇宙が存在したことを突き詰めて考えていくことにある。神が創ったとファイナルアンサーを最初から出されたら、宇宙の起源を探っていく意味がなくなるじゃないか。そして、我々はどうなるのか」と言ってる。これは本当に信仰の世界です。

「宇宙は人間が生まれてくるようにできている」と最初に言ったのは、1970年代、オーストラリアのブランドン・カーターだったと思います。彼は「宇宙の人間原理」と言いました。宇宙の原理をひと言で言うと、「人間が存在するのにピッタリの、微調整ドンピシャでファインチューニングされている」

でも、なぜ宇宙は人間を存在させる姿をしているのか。宇宙から人類がいなくなっても、宇宙は全く影響を受けないんですよ。人間がいなくなることで宇宙に困ったことが生じるなら、人間を生かさなければとなるかもしれませんが、人類が一瞬で全滅しても、宇宙は何の影響も受けない。なのに、なぜ人間を存在させないと駄目なんですか？彼の考えによると、人間のような知性体が「宇宙って、すごくうまくできてる」と観察者として感動してくれないと、宇宙は張り合いがないから。ええ〜っ！これ、ほんまに宗教じゃない？宇宙はエネルギーと空間でしょ。人格じゃない。だから、感動もへったくれもないやん。神が創ったとなると、科学者がうまくいかないって…。

それで、多元宇宙論が出てきました。私たちが住んでいるこの次元ではなく、9次元の多元宇宙の中の一つだったら、偶然こんなに調整されているものができたかも

しれない。多元宇宙はだれも証明できない仮説なんです。そういうのがあれば…というのを信じてるんですよ。つまり、両方とも信仰なんです。

そんなややこしいことを考えんと、**「はじめに神が天と地を創造された」**

それでいいやん。これが正しいんです。この世界が創造主にどのように創られているのかを考える、理論物理のクリスチャンの科学者もたくさんいます。

創造主がおられる。その神は唯一の神である。人が作った宗教の神々ではなく人を創った方。全宇宙の第一原因者がおられる。これが第1のポイントです。

2) 創造主がおられることを信じているのは、クリスチャンだけではありません。イスラム教徒も信じてるし、日本の新興宗教の中にも、宇宙を創った神について言及する宗教があります。特定の宗教じゃなくても、「偶然でこんなにうまくできるはずがない。この世界を創った神がいるに違いない」と、漠然と信じている日本人がいますよ。時々ね、そういう方がいらっしゃる。だから、創造主がおられることについては共有し合えるけど、それだけでは不十分なんですね。

その創造主はどんなご性質か。その方に近づくためにはどうしなければならないのかについては、創造主自らが打ち明けてくださらなければ、神のことを正しく知ることはできません。

数年前に見た、名前は思い出せないんですけど男性のエッセイです。

9歳年下の弟がいて、9歳も離れていたら、そんなに兄弟喧嘩しない。

その弟が中学に入った頃から、やたら鏡の前に立つ時間が長くなって、髪の毛を触わりまくって。思春期？ところが、時々鏡の前で作り笑顔をする。

髪型やニキビのお手入れなら分かるけど、作り笑顔って…。

芸能人みたいやな。何考えてんのかな。兄弟でも考えること全然ちゃうな。

でも、9歳年下やから温かく見守ろう。だけど、鏡の前で笑顔を作るのが、高校生でも大学生になってもずっと続く。社会人1年になった時、就職祝いで、兄弟で居酒屋に行きました。お酒が入って饒舌になり、何でも話せる雰囲気になった時、

「おまえ、時々鏡の前で笑ってるやん。あれ何なん？」「兄貴、見てたん？」

彼らのお父さんは早くに亡くなったんです。弟はまだ幼なかつたので、お父さんの顔を覚えてない。お父さんは写真嫌いで数枚しか残ってなくて、写真嫌いだから、全部怖い顔をしてるんですね。

ある時、お父さんの法事か何かがあった時、親類が集まって異口同音に言ったのが、「弟君は笑ったらお父さんにそっくりだ」「ほんまや。そっくりや」

僕は、お父さんの顔を思い浮かべようとしても分からない。

でも、僕が笑った顔はお父さんに似てるんだ。だから、お父さんに会いたいと思った時、鏡の前に行って、笑顔を作って、お父さんと話をする。

今まで「なに芸能人ぶってんねん。あほちゃうか」と思ってたけど、浅はかだった。なぜそうするのかは、本人から打ち明けてもらわない限り、正しいことは本当には分からない。そんな深いことを考えてたのか。

あの時、茶化さないでよかったという内容でした。

血の繋がった愛する弟が考えていること、やってることですら、本人が打ち明けてくれない限り、なぜそうしているのかは分かりませんよね。

ましてや、目に見えない神、人知をはるかに超えた知恵者、全てのものを創られた第一原因者を、人間の側で「神はこうじゃないか。こう考えてるんじゃないか」といろいろ考えても、全く的外れということがあり得るじゃないですか。

ある人たちは「神はバチを与える存在だ」と言い、ある人たちは「神は私たちを創って愛してくださっているから、罪とか咎とかルール違反とか、そんな細かいこと言わないよ。何をやっても『よしよし、いいよいいよ』と迎え入れてくれるんだ」だれが言ったんですか？

神が考えておられること、神に受け入れられるために何が必要かは、人間の側がああだこうだと考えて確信したとしても、全然ズレていることが十分あり得るんです。正確に知るためには、神自ら「わたしの考えはこうだ」と語っていただくしかないんですね。それを語るために来てくださったのがイエス・キリスト。

これが第2のポイントです。

神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。

神はどのような方なのかを伝えるために、神の本質を持っている方が、人としてこの世界に来てくださった。イエス・キリストを通して、神がどのような方が示してくださった。見えない神はどんな方ですか？イエス・キリストのような方です。イエス・キリストのように考え、イエス・キリストのように嘆き、イエス・キリストが喜ぶことは神が喜んでいること。神が喜んでいることはイエス・キリストが喜んでいること。

目に見えるイエス・キリストを通して、目に見えない神の本質を初めて知ることができる。そして、わざわざこの世界に来ることによって、神は愛なんだということを明らかにしてくださったんですね。

昔、アメリカで奴隷解放運動がありましたね。その運動で、すごく大きな働きをした3人の主要人物がいます。

①南北戦争を指揮したアブラハム・リンカーン大統領。全歴代大統領の中で一番尊敬されている大統領。あのトランプ大統領も尊敬しているという。

②「アンクルトムの小屋」を書いたストウ夫人。彼女の作品はすごかった。

③不屈の男フレデリック・ダグラス。リンカーン大統領もストウ夫人も白人ですが、彼は黒人の奴隷です。奴隷の中から立ち上がって、不屈の男として活躍するんです。彼の自伝が世界中で読まれて、解放運動のうねりになっていったと言われています。彼のお母さんは奴隷。お母さんの両親も奴隷。奴隷から生まれた子供は生まれつきの奴隷。だから、お母さんは生まれつきの女奴隷。

彼女は白人の主人にレイプされました。それで生まれたのがフレデリックさん。

主人の奥さんは嫉妬して、黒人女性が産んだ子供をメチャクチャいじめるんですね。酷い黒人差別を受ける中で、特にお母さんはターゲットにされて、出産後すぐに20 km離れた別の農場に追いやられ、そこで働きました。

ところが1年に何回か、このお母さんが、全ての労働が終わった時にこっそり抜け出し、片道20キロ歩いて、幼児の彼のところにやってきて、寝かしつけてくれた。「今日、こんな辛いことあった…」背中をトントンしながら「そうか、そうか」と言って。1年に何回か、一晩往復40キロですよ。

朝パッと起きたら、お母さんはいない。早朝の労働に間に合うようにこっそり抜け出して、20キロ先の自分のところまで帰って行くんです。

7歳になった時から、お母さんがピタッと来なくなったんですね。

いつまで待っても来ない。風の便りで聞いたのは、亡くなったということ。

自分は、その死に目にも会わせてもらえなかった…。

自伝の中で、彼はこう書いています。「私が奴隷でありながら奴隷根性にならなかったのは、この母のお陰だと思う。母は私に示してくれた。私は、母が見つかったら折檻されるリスクを負って、往復40キロを歩いて会いに来てくれるだけの価値がある人間なんだということ。」

言葉で「愛してる」だけでなくリスクを負って。途中で見つかったら、どんなに酷い拷問を受けるか分からない。でも、自分が産んだあの小さな子を慰めてあげたい。励ましてあげたい。「エールを送ってるよ」「あんたを愛してるよ」と伝えたい。

「一生の間に数回来てくれた。私はクズじゃない。ゴミじゃない。1人の女性が私のことを、命のリスクを背負ってでも、1回会うだけの価値がある人だという扱いをしてくれた。その事実が私の励ましになった」

言葉による愛というよりも、行動による愛。キリストは神のあり方を捨てて、人としてこの世に生まれるほどに、私たちを愛してくださいました。

片道20キロじゃない。天の栄光を捨てて、神なのに人として来てくださった。

それほど私たちを愛してくださった方がイエス・キリスト。この方は愛なんです。

でも、こんなことも言われたんですね。「あなたの目が罪を犯すのなら、片目をえぐり出してしまいなさい。あなたの手が罪を犯すのなら、片手を切り落とすなさい。あなたの足が罪を犯すのなら、足を切り捨てなさい。片手を失って天国に入る方が、全身揃って裁きを受けるよりもまだから」

神は聖い方、正義の方、罪を憎む方。このことばの中に、人間は死んだらおしまいではなく、必ず自分の人生の審判が待っていることを語っておられるんです。

同時に、そのあなたを愛していることを示して、人としてこの世界にまで来てくださった。この方が命懸けで伝えようとしたメッセージが福音なんですね。

神がどんな方であるかは、この命懸けの証言者であるイエス・キリストのことばによって初めて、正確に知ることができるんです。これが2番目です。

3) キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自分を与えてくださいました。
私たちの罪を私たちの責任として追求するのではなく、自分に追及されるべき責任問題として背負い、私たちの代わりに死んでよみがえってくださった方がキリスト。贖いの代価は、神に所属する者として支払った取り返しの代金。
私たちのために命の代価を払って、私たちを取り戻してくださった。
これが、私たちに本当に必要なことだと思うんです。

最初の間はアダムとエバですね。この2人が神に罪を犯した時に最初にしたことは、裸だったので恥ずかしいところを隠すために、自分で覆いを作ったんです。次にしたことは、神が来られた時、会わないように隠れた。
正直に「私は罪を犯しました。赦してください」と言えなくて隠れた。

これを黙想している時、思い出したことがあったんです。
私は2歳の時に父を失いました。病気で。4歳くらいの時に母が再婚して、私と弟は新しい父の下で育っていくんですが、新しい父と私の相性があまり良くなかった。弟は東京で会社経営をやっています。この前も家に来てくれて「お母さんのお見舞いに行ってきたよ。僕の顔見て『剛一郎』言うて」
どっちが兄でどっちが弟か、分からんようになってるんですけど。

彼と二人つきりになった時に、必ず出る話題があるんです。
小学3年生の頃だったか、滅多にないことですが、外食することになったんです。中華料理か何か食べに行こうと。5時に出発するから戻っておくように言われたけど、まだ2-3時間あるので、ちょっと離れた図書館に行ったんですね。
私は本を読みだすと止まらなくなる癖があって、もう没入。
ふっと時計を見たら5時過ぎてた。5時半か6時近かったかも知れません。
しまった！すぐに電話かけたい。でも10円持ってない。

なんて失敗をしてしまったのか！もう急いで帰ったら、様子が違う。家の様子が。みんな立ってるんです。父が怒ってて、もう暗ーい、とんでもない怒りが爆発する中で、とにかく赦してもらわないと駄目だと思って「ごめんなさい！」と謝ったんですけど、「約束したよな」「しました。でも…ごめんなさい」
「なんで約束の5時に戻って来なかった？」「本読んでて、うっかり忘れてしまって。ごめんなさい」「そこに柱あるやろ。それにつかまれ」
私が柱につかまった時、顔面を思いっきり張り倒されてね。ほんまに首取れるか思った。メチャクチャ痛い。つかまってたけど外れて、数メートル吹っ飛びました。

その時、母が助けに来てくれるかと思ったら、助けに来ないで、台所にブワッと走ったんですね。見ると、弟が大きなハンマー持って「また兄ちゃんを殴ったら、これで殺すぞ！」それを止めるために、まず弟の方に駆け寄って行ったんです。
「兄ちゃん、そんなことあったよなあ」「そう、あったなあ」
それを思い出すと、ええヤツやなど。いろいろ意見の違いがあることが多いんですけど、いいヤツやなという思いがしみじみ出て来る。

この時から、私はこの父に対して、平気で嘘をつく人間になったと思います。うっかりミスをしてしまった時、「それはやむを得ないね」と言われるように話を盛って、少しでも自分のミスを小さなものにするために繕い、受け入れてもらうために本当はない話を作り出して。本心でその人の前に行くことができなくなったように思うんです。なぜなら、正直であることが危険だったから。正直にありのままの自分を出すことでこっぴどい目に遭うのなら、自分の生存戦略として、嘘をついて、偽って、演技をして装うこともやむを得ない。それでも自分の人格が完全に狂わなかったのは、母と弟がいつも味方になってくれたから。この人たちには本心が話せる、というのがあったから守られたんですね。

だけど、ふと思うんですよ。子供は親を選べませんよね。自分が住んでる世界をコントロールする力はありませんよね。それなら、その世界の中で生き延びようと思ったら、世界が変わらないのなら、生存戦略として自分を偽の自分に変えてしまおうみたいな部分が、だれにでもあるんじゃないかな。私の場合は特定の人に対してそうでしたね。

なぜアダムとエバが神に罪を犯した時、「神よ、罪を犯しました！」と言えなかったのか。なぜ隠れたんだろう。なぜ人格を隠したのか。正直に出たら、神から酷い目に遭わされると思ったからではありませんか？つまり、贖いという砦なしに神の前に正直に出るのは、自分の身を危険に晒すこと。なので、人が正直に悔い改めるためには、間違いなく赦されるという保証が必要なんです。人が悔い改めることができるのは、赦される時だけです。本当のことを言って罪を認めたら酷い目に遭うとなれば、より巧妙に嘘をつく人になってしまうんじゃないか。

神は唯一であること、神の性質は聖く、愛であることが分かって、自分の罪を考えると、このままでは受け入れてもらえない」と思ったら、神から離れて去って行くか、偽善者のような振る舞いをするか、どちらかだと思うんですね。

でも、それは必要ないと言うんです。どんなに大失敗をしても、その失敗はイエス・キリストが代わりに引き受けてくださったので、自己弁明する必要がゼロ。そのまま正直な気持ちで、神の前に出ることができるんです。この方は私たちの罪を背負って、永久処分して、その上で復活して、私たちに救いを宣べ伝えてくださっています。

これもネットニュースに載ってたんですけど、ある女性がタクシーで帰ろうとした時、運転手さんがよく話しかけてくる方。「お子さん、いくつですか？」「もうすぐ6歳です」「じゃあ、小学校じゃないですか。ランドセル買ったんですか？」ちょっと鬱陶しいな。ドライバーと客の関係で、あまりプライベートなことを言いたくない。だけど、言ってしまった。

「息子には知的障害があるので、支援学校にリュックサックで行くんです。よそのお子さんは新品のランドセルを買ってもらっていいかもしれないけど、うちの子はリュックサックなので、ランドセルのことなんか話題にしてほしくないんです」

